

記念式典のご挨拶

関西大学大学院
外国語教育学研究科
研究科長 竹内 理

本日は、生憎の台風接近の中、外国語教育学研究科創設 20 周年記念の式典にお運びいただき、誠にありがとうございます。先ほど、司会の守崎よりご紹介させていただきましたが、学外より拓殖大学、南山大学、立命館大学の研究科関係者の先生がたにおいでいただきました。誠にありがとうございます。また、学内からは理事長先生、学長先生、ならびに各学部の学部長先生、そして校友会会長の田中先生にもご臨席いただきました。高いところからですが、心より御礼を申し上げます。

本研究科もいよいよ成人の年を迎えるまでになりました。あっという間の 20 年で、まさに光陰矢の如し、の感があります。本研究科の設置を検討していた当時、日本では「外国語教育」を学問分野として捉えることが一般化しておらず、設置の可否を検討するための学内の委員会でも、研究科の名称に「学」を入れて学問体系として打ち出すか否か、あるいは研究者養成を目指した博士課程後期課程まで必要かどうか、といった問題を巡り長い議論があったほどでした。さらに、そもそも需要があるのか、つまり学生が集まるのか、という質問にも悩まされました。長く苦しい議論が続いたのですが、幸いにして、先見の明を持った法人・教学の良き先達・支援者の強いあと押しを頂き、学部を持たない独立研究科として、博士課程前期課程・後期課程の同時申請という、関大史上初めての試みを行い、2002 年 4 月の開設にまで漕ぎ着けました。

その後、本研究科は、幸いなことに、博士課程前期・後期課程ともに定員を順調に満たし、カリキュラムを充実させ、量と質の両面で発展を続けてまいりました。そして、今から 10 年前、2012 年にウイングを拡げ、従来の「外国語教育学」に加えて、「異文化コミュニケーション学」と「通訳翻訳学」の領域を前期課程に設定しました。この頃には既に外国語学部も設置されており、どのように科目を整理し、新たな発展のための余地・余力を生み出すのか、熱い議論が構成員の間で交わされました。

このような果敢な挑戦と不断の努力に加え、修了生たちの、本日もたくさんの修

了生たちが講演してくれますが、素晴らしい活躍が積み重なり、本研究科は、国内外の研究者たちから「外国語教育学」の代表的な教育・研究機関と目されるまでに成長を遂げました。

しかし我々は、この状況に安住することを選びません。20年のこの節目（2022年）に、新たな挑戦として「リモート履修制度」を導入しました。この制度は、千里山キャンパスへの通学が困難な状況でも、インターネットを通じての履修で、修士号や博士号の取得までを可能にする制度となります。国内はもとより海外からも、本研究科の学びに容易に参加できるように、ということを意図しました。ここでも、この制度の必要性や設計を巡り、侃々諤々の議論を尽くすこととなりました。

この20年間の歩みの中で私が強く感じたことは、いくら議論をしても、一旦決まると心を一にして動く「人の和」の大切さです。本研究科は、この「人の和に恵まれた」と思います。「**天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず**」（孟子）といいますが、もっとも大切な「人の和」に恵まれたということに、深く感謝します。そして、この「人の和」をこれからも大切にすることを肝に銘じて、次の10年の発展に向けた出発点として、この節目の日を皆で迎えたいと思います。

初代研究科長であった齋藤榮二先生の口癖が聞こえてきそうです。「なあに、大丈夫。これからも、きっと上手くいく。」

本日は、お集まりいただきまして本当にありがとうございました。これを持ちまして、私の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。